

電友会四国連合会報

第 28 号

54. 10



目次

五十四年の台風シーズンは……高知電気通信部長……二

電退連総会開催……二

電退連事務局長打合せ開催……三

香川電友会総会記……三

事務局からのおしらせ……三

訃報……三

共済会だより(七)……四

表紙のことば……四
 荘野 丹秀……四

OBサークルだより……四

短歌……五
 藤田 基孝……五

特集……六
 秋に拾う……六

岩田 恭一 上田 敏春 宇田 芳子 柏木 四郎
 片岡 増一 高橋 文男 寺地 虎雄 福島 春枝
 土方 義夫 宮武 富栄 森 駿二良 森 登士夫
 吉本 元樹

随筆……猪谷 嘉夫・太田 佳代・久保 哲男……二

合田 勇・野村 俊・山路平八郎

編集後記……三

五十四年の台風シーズンは……

高知電気通信部長

本 間 正 剛



電友会の皆様には、お元気で御活躍、お過ごしのこととお慶び申し上げます。

お手許に届くのは爽やかな気候の頃ですが、私がこの原稿を書いておりますのは、よさこい鳴子踊の間近い八月上旬であります。

台風常襲の高知ですが、本年が恙なく過ぎることを祈りながら、しかしここ二年ほど大きな被害を受けずに済んでいるので、この間の人事異動などによる管内各局の経験不足を補って、いざという際に迅速適確な措置対策がとれるよう、管内の体制整備を図って災害に備えているところであります。

時宜を得て、七月十七・十八両日、通信局計画総合災害演習が高知市朝倉針木の新設なつた高知市針木浄水場用地を主会場に、荒倉地区、勝賀瀬地区、朝倉局などへの復旧出動も含めて、実戦に即して実施されました。

通信局長、副局長、保全部長をはじめ通信局各部長、搬送・無線通信部長、地元の私以下総数約三百名の参加規模となりました。

とくに今回から、地元通信部は全局参加で実施されたので、たいへん充実した演習となりました。

本社から菊地保全局長が来賓としてお見えになり、高知通信部長として御在任中の昭和四十五年の十号台風の御体験から、応急復旧対策などについて貴重な御挨拶を頂きました。また今回から、関係諸団体など一般公開をして多数の参観をいただき、迅速な復旧作業を眼のあたりにし、さらに、多くの災害復旧機器の稼動をみて、公社の災害対策について深い理解をいただきました。

演習開始後二時間半近く、総ての復旧措置を完了し、通信局長と高知県知事との記念通話は参加者全員ならびに参観者に、公社の災害対策、行政の災害対策ともどもの充実ぶりが深い感銘を与え、前日までの雨のための悪条件のなか安全作業に徹した演習を完了しました。

さらに高知通信部は、管内各局の一層の災害対策の強化を図るため、八月二十七・二十八両日、通信部計画の防災演習を実施し、各局が万全の備えをもって台風災害に立ち向えるよう、充実した演習実施を計画しております。

高知通信部管内は、過去の幾多の台風・集中豪雨等の災害を教訓として、伝送路、重要回線の二ルート化、応急復旧用機器の充実等の諸対策に取り組んできました。本年も引続きこれらの推進に努めているのと同時に、特にこれまで配備してきた応急復旧用設備を、安全かつ確実に運用するため、日常の維持管理の強化を図ること、さらには災害時に迅速適確な初動体制をとれるよう、措置、すなわちソフト面に力を入れるよう、通信部の重点施策のトップに掲げて取り組んでおります。

今年梅の花が下を向いて咲いたので集中豪雨が来る前兆とか、竹の花が開いたので大

きな台風が来そうだという土地の古老の話があるようですが、昨年の椎の花が見事に咲く年は台風必至という占いが外れたように、何事もなくて此の原稿が活字になって再び自身に返ってくるかどうかは、お天道様だけが知っていることでしょう。

備えあれば憂いなし。
最後に、諸先輩の皆様のみますますの御健康をお祈り申し上げますとともに、本年十一月高知で開催とお伺いしております電友会四国連合会総会が盛大に催され、皆様のお元氣なお姿にお目にかかれることを楽しみにお待ちしております。

電 退 連 総 会 開 催

電退連（電電公社退職者団体連合会）第一〇回定例総会は去る六月十四日午前十一時から、東京都中央区銀座京橋会館において開催され泉連合会長が出席しました。

議題は次のとおりです。

- 一 昭和五十三年度事業報告承認の件
- 二 同 決算報告書承認の件
- 三 昭和五十四年度事業計画(案)承認の件
- 四 同 収支予算(案)承認の件
- 五 その他

(イ)生存者叙勲等、(ロ)恩給共済年金関係法案の経過等。

会議中西村尚治、長田裕二両参議院議員から直接電話をもって延長国会最終日である本日の国会の審議模様を報告されるとともに恩給共済年金関係法案の成立困難の状況が伝えられました。

また、会議の途中新任の森谷昭夫公社厚生局長が臨席、ごあいさつがありました。

電退連事務局長打合会開催

五十四年度全国事務局長打合会は七月十八日午前十一時から東京都中央区銀座京橋会館において開催され、当会より玉川事務局長が出席しました。

出席者は公社より岩佐厚生局厚生課長、本部より行広会長、今井、佐藤両常任理事、嬉野事務局長、坪内事務局次長のほか各地方団体常任理事並びに事務局長が出席し次の議題について協議を行いました。

- 一 五十四年度共済年金受給者の処遇改善の経過と今後の対策
 - 二 生存者叙勲等の現状と今後の問題点
 - 三 各団体の提案事項、要望事項について
- 会議中沖繩遊説より帰着の長田裕二先生が空港より直行され共済年金関係の経緯についてご説明がありました。

香川電友会総会記

汗ばむような好天に恵まれた五月二十九日緑に映える高松城披雲閣大広間において、本年度定期総会を開催した。出席者も一九〇名に近くさしもの大広間も手狭に感じられる盛会振りであったことを何よりと喜んでゐる。

総会はまず逝去された会員の冥福を祈って黙祷を捧げた後、会長あいさつに次ぎ議長に三好利雄氏を選出し一般経過報告、会計報告および会計監査報告が行なわれた。次いで会則一部改正に入り(一)満八〇才に達した会員の会費免除案(二)病氣見舞贈呈案について論議されたが(一)案否決、(二)案採択承認となった。

続いて会長互選を行なったが池田清澄氏を再選し、役員全員も再指名され役員全員再任

となった。

本日のハイライト管内初の米寿の祝が片岡友吉氏欠席のため三好義士氏が代行で絶大な拍手の裡に贈られ次いで喜寿を迎えられた五氏の方々に祝辞と共にお祝がそれぞれ贈呈された。

最後に参議院議員長田裕二先生の祝電披露を以って総会を終り、引き続き顧問の方々の臨席のもとに懇談会に移った。

石井香川通信部長のあいさつ、高松電話、高松電報、丸亀報話の各局長新顧問の方々の紹介と新会員三二名の紹介を行ない懇談となった。

外の緑に包まれた会場内は前年好評であった香西伊三郎氏の司会による、のど自慢で一層の盛り上がりを見、久方振りの歓談はいつはるともなく、時を忘れる盛況であったが三時過ぎお互の健康と再会を願いつつ散会した。(高松・久米記)

事務局からのお知らせ

○ 電友会四国連合会総会の開催

本年度の連合会総会は十一月八日(木曜日)高知駅前第一ホテルで開催する予定です。代議員の方には詳細後報致します。

○ 昭和五十四年度各県の会総会

本年度の総会は次のとおり開催の予定です。

- 徳島 十月三十日(火) 午前十時
- 徳島駅前 阿波観光ホテル
- 愛媛 十一月一日(木) 午前十時三十分

○ 保険料控除申告書の提出について

本月は保険料控除申告書の提出月です。扶養控除等申告書(本年一月職員部厚生課あて提出した方)を提出された方で当年中に支払った保険料がある場合は、忘れずに四国電気通信局職員部厚生課共済係あて十月十日までに提出して下さい。余白に年金証書記号番号と自宅電話番号を洩らさないように。

○ 電電公社保養所の利用について

保養所の一覧表は会員名簿の末尾に載せてあります。保養所利用申込書は各県の会事務所にありますから発行して貰えます。(公社職員と同額の料金です)

訃 報

次の方々が亡くなりました。謹んで哀悼の意を表します。

氏 名	死亡月日	行年	所 属
一 築智市殿	54・6・2	七八	徳 島
浜野喜代子殿	54・6・7	七七	丸 亀
仙波 粒殿	54・6・8	六一	松 山
勝田 進殿	54・7・12	五七	松 山
竹島久寿殿	54・7・24	七五	高 知
平木正雄殿	54・8・20	七五	高 松

共済会だより (七)

電気通信共済会四国支部
福祉相談所

◎援護のお見舞金を贈呈します

心身障害者などのご家族に、今年度から対象範囲を拡大し、援護のお見舞金を贈呈することにしていきます。

受付〆切りは十一月十日です。

詳細は、「電電四国」七月号に掲載していただきますのでご覧ください。

◎お子さんの勉学に

育英資金をお貸しします

一 貸付対象

公社、全電通、会に永年勤続した退職者及びその死亡した方、並びに在職中死亡した方等の子で学資の支弁に困難な方

二 貸付内容

高校	月額	一万円
大学(自宅通学)	月額	一万五千元
大学(自宅外通学)	月額	二万円
短大、高専	月額	一万五千元

三 返済方法

卒業の翌年から高校は五年以内、大学は十年以内に半年賦または年賦で返済していただきます。利息は年三分です。詳しくお知りになりたい方は、福祉相談所(三二一三三三二二)へお問い合わせください。

◎趣味の作品展を開きます

ご出品をお待ちします

一日 十一月六日(火)〜九日(金)

午前十時〜午後六時(九日は午後四時まで)

二 場 所

松山市清水町三二七九

四国電信電話会館 二階 中ホール

三 出品品目

洋画、日本画、書、写真、盆栽、手芸、その他(いづれも、既発表のものでも結構です)

四 出品申込

十月十五日(月)までに申し込んでください。(電話で可、三二一三三三二二)多数の方の申込みをお待ちします。

五 観 覧

OBの方の出品です。多数の方の観覧をお待ちします。(この期間は、奥道後遊園地と萬翠荘で菊花展が開催されています。これと組み合わせでの観覧もおすすめします。)

◎OB大学園芸科を臨時開催します

場所は新装オープン中の電電会館

一 日 時

十一月八日(木)

午後一時三十分〜四時

二 場 所

松山市清水町三二七九

四国電信電話会館 二階 大ホール

三 講座内容

冬期の園芸管理について

四 講 師

渡部義綱先生

五 その他

当日は同じ電信電話会館内で、OBの方の趣味の作品展を開いています。この観覧もかねてご出席ください。

表紙のことば

雀 莊野 丹秀(内海)

テレビの動物記録映画を見るのが好きだ。子を育てる親の姿は実にほほえましい。ときには自分の生命をかけて危険から子を守る美しい愛情。子供が生育してしまえば親は自から愛情をたちきって子ばなれして行く雄々しい姿。人間もそれが自然の法則にさからわない生きかたかも知れない。

OBサークルだより

第二回電電OB軟式庭球大会記

初夏の六月二日堀之内市営コートにおいて電電OB軟式庭球倶楽部の有志が集合して第二回大会を開催しました。

前回から約半年振りにラケットを握る人、入会して何年目かにテニスをする人、日頃余り汗を流すことのない人々がコートを走りまわり、ファインプレー、珍プレーの続出で、する人も、見る人も、結構楽しく半日を過ごすことが出来ました。

リーグ戦の結果は若さで吉村、永井組が優勝、最年長の小松組が二位に入りました。

今年度は全国OB大会を九月下旬頃松山にて開催する予定ですから、腕に覚えのある方は是非大会に出場するよう期待しております。(松山 木村利一記)

「でんでん日尾クラブ」第八回集会

土用丑の七月二十一日午後、夏季例会をいつもの久米公民館で開く。回を重ねるにつれて親密度はいっそう濃くなる。

当面の議事を協議してから、電友会員の西原市議に松山市政について聴き、市民としての認識を深くし、熱心な質疑応答が交わされて有意義だった。

今回の新企画として会員の亀田さん宅へ行き、丹精された盆栽を見学する。庭の見事な芝生に快い夕風がきて、近所づきあいの集りはやはり楽しかった。(松山 T生)

高知電電退職者謡曲会の近況

共済会援助のもとに本年二月一日会員数二十八名で発足した高知電電退職者謡曲会も半年を過ぎてようやく練習にも熱が入ってまいりました。毎月第一、第三土曜日の午後一時から三時まで高知市上街公民館(上町三丁目)で観世流は高知通信部筒井利喜氏喜多流はOBの岡村正雄氏の指導のもとに毎回二十名程度の出席者で熱心な練習が行われています。半年を過ぎて大分自信も出来面白さも加わって練習に汗を流しています。来年の正月には初謡い大会を開こうと張り切っています。ただ上達するか楽しみです。謡と言うととかく大変むつかしいように思われがちですが、素人でも練習すれば誰でもある程度は上達するものです。正座して腹から声を出す。これが謡の基本です。運動不足になり勝ちな老後生活にとってかっこうの運動にもなりお互い話合いの場としても活

用しています。

(高知 Y生)

やまもも句会詠草 (高知)

- 花合歡や明るくなりし滝の空 瓶子
- 車前草の道平らかに滝近し ひろし
- 山霧やふところ深く滝を抱き 啓子
- 山水を堰く石積や藪萱草 花子
- 毘沙門の湖面の緑したたりぬ 啓子
- 石段を数えて登る滝の道 花子
- 池の面に影を落しぬねむの花 佳代
- 雨の中立ち去り難し滝の音 淑
- 雨しきり滝水岩を流れをり 三千代
- 花合歡のしだれる枝の池にふれ 淑
- 花びらの散るが如くに梅雨の池 佳代
- 夏蝶の真一文字に滝よぎる 三千代
- 滝水の音ばかりなり毘沙門宮 淑
- 緑濃き水面にねむの花写し 三千代
- 梅雨晴間看とり疲れて窓に佇つ ただを
- 早桃と断り添えて送り来し と き
- 御手洗は明治の寄進苔の花 と き
- 滝しぶきかかる岩まで進みけり としむ
- 滝の風岩石菖の揺れやまず 隆
- 滝音の騒然として岩静か 隆
- 御手洗の流れどくどくだみ咲きにけり 幾久子
- 紫陽花や泣きだしそうな曇り空 幾久子
- ふるさと遠き田植のいま盛り 重信
- 草原に霧這いのぼり阿蘇見えぬ 重信
- 大阿蘇の麓の雨の田植かな 久子
- 佗住の簾をかけし一間かな 久子
- 庭先のカンナの燃ゆる簾越し 幸子
- 一人居の慰めとなり鉄線花 幸子
- あかつきの鷺鳴きわたる若葉冷え 幸子

- やまももの色みづみづし梅雨晴間 俊
- 咲き満ちて雄花ばかりの南瓜かな 春子
- 鰻焼く煙地を這う返り梅雨 春子
- 金魚はねる音に出店の夜の秋 陽子
- 並べ干す辣韭の肌つややかに 陽子
- 里のつと夏大根の二三本 千代
- 工作の鯉持ちかへる五月かな 千代
- 店開きするボート屋の夫婦かな 千代
- 窓伝う雲の玉や梅雨荒し 汎子
- 籐椅子を喜寿祝にと贈りけり 汎子



旅

藤田基孝(宇和島)

ウイスキーはコップに揺れて匂ひたつ汽車は
みちのくに入りて行くらし
陸奥の海の潮打ち寄する汀ぎはまで菜の花畑
明るくつづく

小松原つづく下北の磯黒く砂鉄をふくむ砂の
かがやき

恐山の三途の川の川岸に老いたる巫女の奪衣
婆のごとし

街を見むと戀ひのぼり来し四十階わが部屋よ
りもスモッグは濃し

―ホテルニューオータニー―

特 集

秋に拾う



岩 田 恭 一 (松山)

秋立つ八月初旬北海道の旅行をしました。何故私が北海道旅行を思いついたかと云うと、軍隊で小樽に居たこと、復員してはじめて踏んだ祖国の土が函館であったこと等もありませんが、それよりも千島列島の北端幌筵島での生活、雪解け後に種々の可憐な花、一度に短い春と夏がやって来る気候等、思ひ出は尽きないが復員後間もない時期に、若し千島へ行けるようになれば是非とも幌筵島へ行つてみたいと考へたことがありましたからです。

「北方領土の返還」をと日本人の切実な声が起こつて久しいが北方領土と云つても千島列島全部でなくて齒舞諸島や国後島等で、またソ連はなかなか千島列島を日本へ返しそうにない。

生きてゐるうちに幌筵島へは行けそうもない。せめて北海道へ行つて旨いものを食べてみたいと思ふようになって二〇年近くになります。食物への郷愁というものは格別でなく、代に食べたもの旨さというものは格別でなく、なかなか忘れられないものではないでしょう。か、近頃各地方の物産展等の催もあり松山に居ながらにして沖繩、北海道は勿論のこと各地方の名物や物産を口にすることが出来、我家においても北海道の馬鈴薯やイクラを買つたがもっとおいしかったのと思ひながらたべて

います。特に馬鈴薯については、一九年暮から二〇年春にかけてよく通信所のストーブで焼薯にして食べたものでした。味はさつま薯より甘味は少いが、白く粉をふいて味もあっさりしており、どの薯もおいしく感じたものでした。今度の旅行でもいろいろなる料理に馬鈴薯はよく出ましたし、串ざしにして天ぷらにしたものも食べてみました。いづれも松山で食べるよりおいしく感じましたが焼薯にした時のような味は味わうことは出来ませんでした。懐しい幌筵島への郷愁を感じながら北海道の旅を終えましたが、北海道もやはり観光の地と化して旅行者の多いことは変りないがまだまだ自然が残り広い土地であることを痛感しました。

上 田 敏 春 (松山)

めつたに旅をする機会もないので、たまには命の洗濯にと、家内と子ども京都の秋を歩くことにした。

京都はかつて息子も娘も遊学していた関係もあって、ちよいちよい来たこともあったが、気の向くままに下手な俳句でも楽しみなながらというのが今度の目的であった。宿も西本願寺に近い旅館であったが、近代的なホテルと違って食事も部屋へ運んでくれるし、水入らずで一本？傾けることもできるというもの。宿へ着いたのが昼頃であったので一番近い西本願寺からぶらり歩きを始める。

ぶらぶらと古都の秋風吹くままに

さて西本願寺に入つてみると、京はまさに秋、天をつく大銀杏黄葉にしばし歩をとめる。

句づくらぬ妻いざないて佇つ黄葉もみぢ

腰深く掛けて堂縁風涼し
格別に急ぐ用なし黄葉見る

三十三間堂から方広寺の方へぶらぶら歩きながら、とある人に道を尋ねると「ご主人は軍隊生活の経験がありますか」と言ふ。何でそんなことを言うのかなと軽く受け答をしていると、何のことはない自分の手柄話を聞いてもらいたい様子、変つたご仁もあるものと、道を教えてもらった手前聞き流しながら歩く。形ばかりの方広寺に残る鐘樓には、今を去ること三三三年前「浪速のことは夢のまた夢」と詠い残したその夢さめやらぬ一六一五年この梵鐘の四つの文字が豊臣家の命取りになつたかと思つと感慨また一人。

秋風や鐘は昔を語る

力一ぱい引っぱつても一つ撞くのがやつとの大梵鐘である。知つたかぶりをして聞き後である妻に説明一しきり。

清水寺までは日の暮れぬうちにと三二〇円を奮発して車で乗りつける。土産物店の中を通過つて見覚えのある石段にさしかかる。

秋暑し妻待つ磴に歩をとめて

清水の舞台から眺める夕紅葉は京ならではの思い一人。

昏れてなお残る赤さや夕蜻蛉

書けばきりのない古都の見て歩きの二日目、は円山公園、智恩院、南禅寺あたり、或は茶屋に、或は湯豆腐に、京の味覚を追いながらの夫婦旅、ぬか味噌臭くなつた家内も、久々の京の秋を喜んでくれた。

紅葉濃し妻を佇たせて撮ることに

客を待つ座布団小さき紅葉茶屋
紅葉散りて客なき茶屋の緋毛氈

宇田芳子（高知）

騒々しいミンミン蝉の声も跡絶えてようやくツクツクボシのあわれさで夏の終りを告げる夜な夜なコオロギの鳴き声で秋の気配となりました。

山々の木々が美しく紅葉する秋一年を通じて一番暮らしよい季節でしょう。秋風が肌にしみ感傷的になる秋、私は此の季節が一番好きです。

在職中は思うように旅行にも行けなかったので足腰の立つうちにと東北、北海道、九州方面に旅行しました。紅葉の織りなす錦絵、行く道々の溪流、松の緑の中に点在するハゼ、楓、紅葉、走馬燈のように走り去る車窓よりの眺める景色は一段と美しいものです。

澄み切った青い空、野山の緑や、紅葉はくつきりと浮びスキの穂が秋風にゆれ、可憐な萩の花が目につくころ秋が深まるにつれて山の涼風が冷やりと肌に感じ心のすみずみまでしみとおるよう感じます。秋の旅は最高です。

旅行中は無事故で終える事を祈りつつ十一月中旬には中風寺参拝に参加します。このお寺は中風除けて三回続けて参拝しないと効果がないそうです。今年で三回目です。一回目は一年、二回目では二年、三回目では一生中風しないと、お蔭で元氣です。

老人は足、腰からと申しますので早朝体操に参加し張切っています。自分の好きな趣味の輪もひろめお友達も沢山できました。退職者の皆さんも適当な運動を続け、健康に留意せられ元氣でお過しのことを祈ります。

柏木四郎（石井）

恒例の盆踊りも終り、今年もまた台風の予報と共に稲穂は出揃い遠近の鎮守の森から祭太鼓や笛の音が聞える今日此の頃である。私にとっては退職二年目の秋、そしてまた神主として再出発した二度目の秋を迎えることとなった。

神社奉仕も永年の公社生活が身につけているせいか苦行の続く毎日である。斯道まことに若輩ではあるが私なりに真心を以って奉仕させて載いておる。

或る神社の秋祭りに奉仕したときのことである。公式祭もおわり、いよいよ神幸祭（神霊を御輿にお遷しする神事）を始めようとしたとき、子供御輿の子供の中から「神主さん今日このみこしかついだらいくら呉れるんですか」との質問があった。世相、人情がいかに現世の如くであつても、この突然の質問には、なんとも言いようのない淋しさを感じたが一瞬脳裏をかすめたことは在職中大人の世界の職場にもこれに似た数々の出来ごとであつたことを思い出し苦笑した。そんなとき小学校四年生位いと思われる子が大声で「皆んな聞け！お前達そんな気持ちでみこしをかつきに来るとるんか。そんな気持ちの者はみこしをかつき資格ない」と皆んなをたしなめた。お蔭で新米神主の出る幕はなく、その子の一言で一件落着いたわけである。

後日その子供の家を訪ねたところ、なるほどとうなずけるご家庭であつた。躰というものは対面して行うものばかりではなく「子供は親の後姿を見て成長する」とまで言われているが実にそのとおりでした。これからこの子等が立派に成長して行くのが楽しみである。

戦後三十有余年が経過した現在奇妙に感ずることがある。それは「神無き祭」である。衣料祭、肉祭、さくら祭等々果ては、くつ下祭まであるのだから驚く。人を集めて一儲けするための催しには必らずといつてよいほど祭りという字が目につく。神惟である我が国には古くから神を中心とした祭があり政治があつた。人々もまた、素朴、純真、勤勉で人情も豊に、貧しくとも苦しくとも心から祖先を尊び親、夫婦、同胞を愛し、村を愛し、国を愛した。そのような人々によって神を崇敬し感謝と願をこめて行なわれたのが祭りである。

祭りといえはまず神事があり、つぎに行なわれるいろいろな行事（アトラクション）は総て奉納行事であつた。ところが現世はどうであらうか、人を集める手段としてアトラクションのみを祭りという呼び声に使っている例は少くない。心ある人には神をあざむき人をあざむく感がしないでもないと思う。

すみ切つた秋空の下、昔年らの素朴な秋祭りに奉仕して、ふと、感じたことである。

片岡増一（松山）

約三十坪の畑に、桃の早生と奥手、梅、梨、ビワは異種を一本ずつ、蜜柑はネーブルからポンカンと多種のものを植え、早春の花、秋の実を楽しむのは、いい運動になり健康に役立っています。

六年前の小さい木は高さ五メートルにもなったものもあり狭い土地に植えすぎて剪定に弱っています。

木の小さいころは野菜も作りましたので、農業試験場の野菜教室へ出て、土作り、水やり、施肥など勉強しました。果樹試験場では

枝や実を持って行き教えてもらったり、柿の糖度の高い新種の穂木をいただき、自分で接木して育てるなど、当初は興味がわきました。最初に実をつけた桃など、何とかして消毒せずには実がつかないものかと試してみましたが、アブラ虫など防ぐ方策もなく「素人でも最低これだけは消毒しないといけないでしょう」と果試で教えてもらいどころかものになりました。

枝に適当な実のついた秋は楽しいものですが、果樹の種類が多く消毒の時期、農薬が違いますので、忙しいやら面倒なやら「こらお前消毒を遅らせたな」と監察官に叱られるのが定年後の、ノンビリムードのよさでしょう。梅の若芽の出る所にアブラ虫が集まること、梨の赤星病は春に貝塚から移ってくること、カイガラ虫の生態など、百科事典を調べたり、林業試験場へ教えてもらいに行ったり結構運動になります。

小鳥を呼ぶためもあって庭木に赤い実のなる木を植えましたが大分大きくなりました。渋柿の実を木に残しておきますと、ヒヨ鳥が食べに来てくれます。ヒヨ鳥はサエズリながら食べるので、ツグミなどと違って風情があります。

高橋文男(坂出)

五色台の山並に、真夏の太陽が昇り初めると、それに調和するごとくしきり蝉しぐれの音が身をつんざきやが上にも暑さを感じさせますが、その音が次第に少なくなると秋のおとずれが初まります。秋は四季のなかで一番住み良い季節ではないでしょうか。

昔から秋のよさを数々の名言で現わされています。「天高く馬肥ゆる秋、食欲の秋、味

覚の秋、読書の秋」等、又、食欲の秋にふさわしく秋は数多くの果物を我々に与えてくれます。「柿、栗、梨、ぶどう」等私の好きな果物です。秋は私も四季を通して一番好きな季節であります。空は高く、空気はさわやかであり、野には黄金の波が広がり、野道や田の畔には彼岸花が真紅の色で咲き黄金の波と対照して田園美を現わしてくれます。秋に一番感ずる事は春夏の空気が湿気が多いが秋の空気が湿気が少なくはだに感ずる感觸も非常にさわやかで快いものです。

七月の初旬に北海道に旅をした折真夏の頃でありながら四国路の秋の季節ににた感じであり気持よい旅が出来ました。

このような好きな秋も公社を退職して三年有余、年令も六〇才を過ぎた今、ふと感じる事は自己の人生においても晩秋の頃に来たのではないかと考え一抹の不安も感ずるのであるが、一番好きな秋を元氣いっぱい楽しく過したい気持です。

寺地虎雄(板野)

銀杏の梢がやや黄味を帯びてくる頃ともなると、徳島の山も漸やく秋の気配が濃く、剣山の峯が次第に紅みを増して、やがては里の山を彩る。ツゲ、カエデ、ハゼなどの木々や灌木の紅葉が山全体を包むころには、降るようなヒグラシの声と、夜毎に沓え渡る天の川が幼い頃の郷愁を誘う。毎年のように、今年こそ古里の山々を尋ね歩きたい、剣山の紅葉を見ようと思ひ続けたが果せなかった。私の生れた村は、剣山に近い一字村というひっそりとした村だった。然しそこには、私も、私の弟妹たちも、もうそこには居ない。ただ父母の住んでいた小さな家と、そうする

ことが当然のように、山畑を耕してやがて一生を終え、村の一隅で静かに眠っている父母の墓石があるだけである。私は今頃の季節になると必ずのように、ふっと思ひ出すことがある。どうしてなのかは、今もって解らないのであるが、それは父との思い出である。小学校の五年生位の時だったろうか、父とたしか剣山に登った時である。

途中に大きなカエデの木があり真紅に染まっていた。父はその根元に腰を下して「昼めしにするか」といって弁当を開いた。食事をしながら父は「お前も田舎で住んだほうがいい」と云う意味のことを云ったように思う。私はどんな意味だったのか何と答えたのか忘れてしまったが、父と私が腰をおろしたカエデの紅い色が不思議とハッキリ浮んでくるのである。昨年の夏だったか、たまたまその附近を通ったついでに、カエデの木を探したが見つかる事が出来なかった。機会を見てもう一度探したいと思っている。山山はやがて紅葉し始めるであろうが、今年もまた尋ねられそうもない。山取りや、挿木の手作りのミニ盆栽にせめても掌の上にのる小さな秋を楽しむことになるであろう。

福島春枝(高松)

ここ数年ほど年に二、三度はあちらこちらと旅に出る。昨年十月二十二日京都三大祭りのひとつ時代祭りを見物に行つた。平安京の時代から現代までの時代風俗を再現する祭りで明治二十八年平安還都千百年を記念して始められたそうで王朝風の優雅な行列が御所を出発して平安神宮に向かう、この雅やかな祭りを初めて見物することが出来てよかった。寂光院、三千院へも参詣することができた。

大覚寺、直指庵、二尊院、落柿舎、天龍寺、高山寺、化野念仏寺と有名な名刹古寺の多い嵐山、嵯峨野あたり竹林や名のない草花の小径を歩いて王朝時代のロマンを偲ぶには絶好のところが四季それぞれに変化する趣ある風情がたずねる人の心をホッとさせてくれる。

花によって有名になった寺もあり、萩寺とか高尾の紅葉という風に嵯峨野の散策や洛北大原の里、清滝の清流をぞろ歩きにはやはり秋が一番いい季節ですね。機会を見てお出かけになってはいかがですか。今年もその季節にしたいと思っている今日此の頃である。

土方義夫（高松）

人生早いもので、此の世に生をうけて六十三回目の秋を迎えることになった。公社退職に際し幸い上司のご高配を得、電気通信施設の建設会社に再就職したが、此の秋停年退職の年令になった。

秋は菊花の展示会が随所で催され、実に立派な大輪、中輪、懸崖などが競い合っているのが目に映る。丹精こめた人々の努力が此所に結実したもので、花を見る度に作った人の苦勞を偲び頭の下る思いがする。「菊は土作りから」と云うが、毎日毎日の手入れを考えるとなかなかできるものではない。

昔我々年代の青春時代では、秋はずぶ虫、こおろぎの虫の音とともに木々が紅葉し、短日時のうちに落葉の厳しい冬を迎えるせいか、なんとなく淋しい物悲しい季節とされてきた。当時流行した歌謡曲も悲しい曲が多く「涙の渡り鳥」「無情の夢」「国境の町」などは秋から冬にかけて流行したと記憶している。また日本調の歌謡曲で尺八独特の、静かな

物悲しい調べを取り入れた「船頭可愛いや」「博多夜船」は今でも心の隅に残っていて、秋の夜長のつれづれに庭で虫の音を聞きながら清く澄んだ月を眺めていると、自然に懐かしいあのメロディが思い出される。

秋と云えば中国の北京の秋が印象深い。北京は街路樹が多く、色彩的に美しい街であり北京市全部が城壁で囲まれていて内城外城に分かれている。秋は雨が少く街路樹が至る所で緑濃く茂り湿度が低く、文字通り「天高く馬肥える秋」にぴったりの季節風物である。

北京の人達は秋を満喫するかの様に公園の日蔭椅子に身をまかせて、一日中のんびりと休養をとっている姿がよく目に映った。

また紫禁城の屋根瓦が暖い日光に反射し、黄金色に輝き周囲をとりまく木々の緑と調和し眺める人々の目を楽しませてくれる。最近訪中旅行がぼつぼつ計画されているので是非もう一度北京の秋を見たいと思っている。

宮武富栄（丸亀）

四季のうち秋が一番季節感が強い。高天肥馬の候である。秋晴の空は、大気が澄んではてしなく高く感じる。旅行好きの私には、たまらなく、楽しい日々となって来るのです。もう一度行って見たい所、それは、東北の旅です。北の終着駅、青森は、海、山、半島、湖、そして、温泉と観光的にも、多彩な魅力を誇っています。

北海道と、津軽海峡に向かいあう下北半島は、いまだに俗化されていない。自然の風景と、素朴さが息づいています。国立公園、十和田湖を中心にそこを源にする奥入瀬溪流、標高一、五一七米の八甲田山、高原状の山体をおおう紅葉など時を忘れさせてくれます。

十和田湖は、日本を代表する景勝といわれています。世界でも珍しい、二重式陥没火口湖で、それだけに、複雑で、美しい湖岸線を見ることが出来ます。更に、湖畔をおおう潤葉樹が、紅葉し、青藍色の水をたたえた湖に彩どりをそえるとき、すばらしい東北の秋の美しい自然が、私の旅情をとらえて、はなさないのです。秋と云えば、真先に口にするのは、十和田湖と云うほど好きどころです。今年はどこへ旅行しようかと目下物色中で、旅行出発前の楽しい気分分、胸は大きくふくらんでいる、といった昨今であります。

森 駿二良（阿南）

秋は風音に乗ってやってくる。厳しい残暑のあと、朝夕のかすかな風音にも、耳を澄ますと、忍びよる秋の気配をひしひしと感ずる。わずかに五坪足らずの我が家の庭にも、萩がこぼれ芙蓉が咲く。爽やかな大空には秋雲がたなびき、赤とんぼが舞う。だが定年後の秋は何故か一入淋しさが身にしむ。それを忘れるために私はよく友を誘って好きな吟行の旅に出る。行先は自然の良さが残っている村を選ぶ。本線を乗り継ぎ、鈍行にゆられ、車窓に映る田園風景を眺めながら私は旅を続ける。秋風が身にしむひなびた宿の一室で、友と酌む地酒の味はまた格別である。深い山々に囲まれ、美しい紅葉に心を奪われながら、人情こまやかな村人の話に心を和ませる。自然の風物詩が私の心の琴線にふれ、詩情をかき立てて呉れる。そして私は俳句を作る。

職場を去った老兵の私にも、自然は優しく語り掛けて呉れる。私達は毎年秋に、全国に散らばる電電俳人との句会を持つ組織がある。だから私は何をおいても秋になると旅に出る。

逢えば何と云つても長年同じ釜の飯を食つて来た仲間だ。そして今は役人の肩書をかなぐり捨てて、俳人としての付き合が始まる。定年とは「人生の稔りの秋である」と私は思う。人生の収穫期と云う総仕上げの時を迎えたと思う。たとえ老後は厳しく、生活は貧しくとも、秋空のような澄み切った清々しい心で、せめて、豊かな詩の心だけは持ち続けてゆき度いと思うこの頃である。

森 登士夫（高松）

秋……百穀はみのり大気はすみ草木は紅葉する。立秋（八月八日）から立冬（十一月七・八日）の前日までの間をいうのであるが月でいえば八・九・十月の三月を秋とする……歳時記にはこう書かれています。

いささか膚での感じとは違ふようですが、すつきりしたさわやかさを覚えさせてくれる秋は誰にも好まれるよい季節です。中秋もよし、晩秋も又よしですが私ははじめて秋の気配を感じた時が一番好きです。

——からっとした風がかすかな音をたてて吹きぬける。「アツ秋の風だ」と思えば陽の光りも幾分か和らいている。——こういう気配を感じとった時には身も心もさわやかに新鮮味を覚えさせてくれます。

親猿も子猿もしたしけさの秋

この句は私の俳画の師・赤松柳史先生の句ですが何時口ずさんでもさわやかなすがすがしい気持にさせてくれます。これは先生が常に淡淡として、大へんさわやかな方でしたから、それが句に表われているのでしょう。人間、秋のようにさわやかにすがすがしく

生きたいものです。

吉本元樹（松山）

宿毛から柏島に到る途中の大堂断崖、観音岩などの眺めは素晴らしい。私は一度船に乗って断崖の真下から見上げてみたいと思っている。恐らく頭上に迫って来る気迫に圧倒されるのではなかるうか。この大堂海岸を見晴らす山上の展望台の近くに猿の餌付場がある。六月頃知人と此処を訪れたが、駐車場から餌付場に到る小道の両側にずらりと猿が並び、その間を歩いてゆく我々が彼等からじっと見つめられた時には些か妙な気がした。が大変おとなしい猿達である。秋になると山の木の実が熟れるので、此の場所よりも、山の彼方此方に散らばっているようである。柏島に通ずる山腹の道路には、左右から木が道路上に被いかぶさっているような場所がところどころあるが、秋の季節には彼等の活動場所の一つになる。

彼等のうちの一部は木の枝をゆさぶって熟れた木の実を落す役、残りの群はパラパラと道に落ちて来る実を拾って走り廻っている光景をよく見かけたものである。親猿の懐にしがみついた子猿の頭は何時見ても愛嬌のあるものである。如何にもとりすました様な親猿の顔に比べて、パッチリとした丸い目のあどけない子猿の顔には、此方の顔が自然にほころびて来る。

宿毛局に在動中、所用で柏島へ出張する際は此の場所へ猿達に出会い、車をとめて暫く眺めるのが一つの楽しみであった。が将来此の道路が開発され立派なハイウエーとなった時には此の猿達との出会いはなくなってしまうのではないかと些か心配している次第である。



木曾路

随

筆

猪谷嘉夫（高松）

木曾路とは言うものの、最近町並み保存で有名になった、妻籠と馬籠だけで、ほんの一部分にしか過ぎない。名古屋から急行で、中央線の南木曾（なぎそ）で下車。バスで二軒ばかり南西に入った所が、妻籠、旧中山道に沿った宿場である。江戸時代の街道筋そのままの連子格子の家並みが一軒ばかりつづいておる。町の中程に本陣（参勤交代制度で認められた、貴人や大名の泊る宿）跡と、脇本陣（大名の供人や侍の泊る宿）跡がある。建物は当時のままで、見料をとって内部を見せる。その近くにある郵便局の前には、郵便開始当時の郵便箱、状差し様が設置されておる。

妻籠から馬籠へは、約二里の峠道（馬籠峠）を歩いて越す予定であったが、今にも降り出しそうな梅雨の前触れ模様なので、町外からバスで行く。標高五百米ぐらいの峠だが、雑木におおわれたヘアピン・カーブの道は、往時の旅人にとっては難行の一つであったかも知れない。馬籠の入口一陣馬から歩く。

馬籠（まごめ）の町は、石畳の曲りくねった坂道である。中山道の宿場であり、文豪島崎藤村の生誕地でもある。藤村記念館や清水屋資料館などあるが、少々先を急ぐので割愛する。町並みは、妻籠と大同小異。旅籠に民

宿或は信州そばとか木曾名産をひきぐ店が殆ど軒並みに行灯(あんどん)まがいの看板を出しておいて、京都の太秦にある某プロダクションの映画村でも見るように、古い町並みの情趣を損ねるように思えた。シーズンとは言え平日なので、観光客は稀れにみるニュー・カップル以外は老人の団体ばかりで、急坂の中途で一休みしておる連中もあつた。この二つの宿場を見るには、北の妻籠から馬籠に下るコースが楽でバスの便もよい。

私の生きがい

太田 佳代(高知)

退職者に対し「生きがい」ある人生を共済会の援助により高知退職者の会に今年二月から謡曲をはじめ俳句、茶道と次々にサークルが発足しました。私は各サークルに参加していますが、いずれも盛会で熱心な雰囲気溢れております。こうして、このような機会に恵まれましたことは私の人生に「生きがい」となりほんとうに有難く感謝しております。六十の手習ですが謡曲、茶道は少しやっつたことがあります。俳句ははじめてのことです。つかしいと思いつつ心臓を強くして参加しています。俳句は毎月吟行会を行っています。先生や先輩達の句を読ませてもらって少しずつでも理解出来るようにと努力しています。吟行の楽しみはいろいろな草木の出合い、寂びた野草の花や風景に接して心の安らぎを味わうことです。それに句がともなわなければ情けないですが、歩み歩みながらの句を学びとって、句らしい句が作られるようにと夢みております。なにごとでも一生懸命努力しなくてはよきものは出来ません。趣味を持つことは心が豊かになり、日々の

生活に張り合いを感じ老花防止になります。これからも健康には注意し、一日一日感謝して充実した楽しい老後を送りたいと思っております。

三つの恋の物語

久保 哲男(高松)

早朝ランニングと私。東京の大久保電話局時代から約八年の間、毎朝数キロ走る。当時東京電電では管内の職場対抗マラソンがさかんで第一回大会に五人編成(一名は四十才以上の条件)のトップランナーでかりだされ、反省会の席上で労組の書記長から、チーム成績の悪かった原因はトップランナーにありと認めつけられ、以来毎朝トレーニングにはげみ翌年の新宿地区大会ではアンカーをつとめ優勝したのが病みつき。松山では湯渡の付近を走りつづける私を高校の体育の先生とまちがえられ、郷里に帰ってからは新聞配達とまちがまでマイペースで走りつづける。雨の朝がうらめしいほどだから早朝ランニングは私の恋人。

音楽再生セットと私。これに凝り始めたのが二十年前、大編成のシンフォニーを聞いて涙をながしていたりしていたのを思いだす。最近セットの買いかえをおもいたって三か月ばかり時をぬすんでカタログを読みあさり、法外とおもわれるようなものを編成した。ディスクの内容は昔とあまりかわらないがチェロのソロなどを聞いて胸がジーン。人生のひとこまひとこまがドラマのように思えてならない。若いときも今も人間とは何だろうと考えてもよくわからない。わからないのに性こりもなく考えてみようとする。こんなとき、

いい音楽が私を助けてくれる。だから音楽再生セットといい音楽は私の恋人の恋人。現役精神と私。仕事でも勉強の面でも、この頃よくいわれる中高年族という活字を排除して、いつまでも現役で目標にチャレンジしたい。これは私のこの頃の願い。だから現役は私の恋人。

お大師参り

合田 勇(松山)

六月末、阿南の娘夫婦に連れられて阿南、日和佐、室戸へとお大師参りの旅に出た。あいにくその日は土砂降りの雨、途中レストランで雨宿りを兼ね昼食をとり、小降りを待って出かけ四時過ぎ娘宅に到着。

その夜は話はずみ夜の更けるのも忘れてしまった。翌朝早く室戸へと出発、有料道路も快適である。右に青葉の山野、左に太平洋の青い海、壮快そのものである。まず二十三番薬王寺へ、石段に一円玉が雪のようにおかれてあり、これ厄のがれが出来るとはありがたいことだがと何か気にしながらお参りをすませ、二十四番最御崎寺、二十五番津照寺、二十六番金剛頂寺へとお参りし今回のお大師参りを終える。室戸で一休みし、旧跡、史蹟、宝物館をたずね、阿波の松島と云われる景勝穴喰のみとこ荘国民宿舎にも寄る。室戸沖では一本釣や、サーフィンで県外の観光客も多く賑わっていた。さらに海亀の産卵する大浜海岸も見物した。今回は私達の金婚記念の旅行でもあるので、料亭で祝宴を娘達がひらいてくれ、まったく嬉しい四日の旅行であった。帰り高松駅で老妻とベンチで膝をつき合わせ娘のつくづくくれたお弁当をおいしく食べたのも忘れられない。三十八年公社を退職し

て、余り丈夫でない体ではじめたお大師参りもあと土佐路の三十番安楽寺、三十六番青竜寺、三十八番金剛福寺をのこすだけとなった。次は宇和島經由で三ヶ寺を参り、納経帳を完了し、これを子孫に残せることになりす。道中作の川柳です。

夫婦してお大師参り思い出に

金婚の夫婦四日の大師参り

老妻が尽してくれる巡拜日

今は昔

野村 俊 (南国)

今は昔、テレビ、ラジオのなかった頃は、台風がやって来るまでは、それはこわくなかった。台風といわないで時化といった。室戸岬レーダーとか、気象衛星ひまわり等の観測によって、今は一週間も前から台風の発生、その進路等が発表されて、予報通りに近づいても、又全くそれでも長い時間不安な気持ちが続くものである。

気象衛星は台風雲の状態を明らかに写し得られるのに、それを破壊する人工的技術は開発されないものか。地球も神様が造った当時と神の造った人間の出す公害を受けつつある今の地球とでは、気象的にも動植物的にも随分変化した事だろう。

昔は漁夫、農夫が長い経験を通して、波の様子や雲行き等で、時化の近づいたことを知った。勿論気圧の程度も、風速もわからなかった。よく晴れた、秋風を感じる日、どこからか黄トンボが群れて飛んでくるのがあった。「どこかで時化があったのだな」と昔の人は言った。子供はそれを時化トンボと呼んだ。今はその黄トンボも少なくなかった。

昔から二百十日、二百二十日の前後必ず台

風がやって来た。二百三十日も油断出来ない。第一室戸台風は九月二十一日であった。今年も台風のオフシーズンが待たれる。棗の実も落ち始めた。

思 い 出

山路 平八郎 (高瀬)

大正十一年六月朝鮮に渡り、朝鮮総督府通信吏員養成所(京城)に入所翌年十月同所卒業大邸に勤務。十四年釜山に転勤し終戦まで同地に勤めました。昭和四年病にかかり一ヶ月入院のうえ別府へ三ヶ月療養に帰りました。昭和六年満洲事変が起り、八年頃から毎年の台風で通信線の被害が続発しこんな状態が三、四年も続いたことを覚えています。

六線用腕木が増水のため下から上に段々浸って行く。六・五米電柱が水中に没してその上を舟が行き来する。一ヶ月も水がひかないときもありました。一週間も徹夜で復旧作業に従事したくたになつたこともありました。

昭和八年、日満ケーブル工事(二八対無装荷ケーブル二条)の測量が始まり、一〇年頃から建設工事(工事長、今治出身村上元紀氏)が始まりました。また福岡釜山間の海底ケーブルが布設されたのもこの頃です。昭和十五年釜山電話局の改式工事(監視信号式―自動式)施行されたが旧局ケーブル撤去のさい五〇対電信ケーブルを誤って切断した。重要通信回線が多いので青くなつたが、幸い搬送電信線に代替できて実害がなかったことも忘れられせん。

北支北京南局(局長、村上元紀氏)の自動改式工事の線路工事応援に行き北京、天津、濟南を見物したこともよい思い出です。行けることならもう一度行きたいと思っています。

投稿規定

- 一 会員消息 四〇〇字以内
- 二 短歌、俳句、川柳 五首又は五句以内
- 三 随筆、随想 六〇〇字以内

原稿締切 一月五日

原稿の取扱についてはお任せねがいます。

編集後記

▽五十四年度の年金額改定の内容を盛込んだ公共企業体職員等共済組合法の改正法案は、先般の国会審議混乱の余波を受け他の共済法案(国家公務員、地方公務員、私立学校教職員及び農林漁業団体職員の各共済組合法案)は廃案となり、さらに第八十八臨時国会最終日の七日、恩給法の一部改正法律案のみ国会通過成立したが、共済年金の改善等を目的とした法律案は再び廃案になり、衆議院議員総選挙後の特別国会に提出される見込です。

▽次号第二十九号は五十五年一月一日発行の予定です。特集として「申の年にちなんで」のテーマで六〇〇〇字程度の原稿を募集します。ご協力願います。(玉川)

電友会四国連合会会報 第二八号

昭和五四年一〇月一日発行

編集発行 電友会四国連合会

事務局

松山市一番町四丁目(二七九〇)

四国電気通信局内

電話(〇八九九)三六一二〇二三

印刷 四国電話印刷株式会社